ひときわ背の高い年上の子ももいる１年生の修了式(開校４年目のナブルの小学校)

ビラーン通信 81号

2015 年 4 月 25 日発行

NPO 法人ビラーンの医療と自立を支える会
（英文名略称・ＨＡＮＤＳ）
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11
TEL & FAX:045-500-9151
E-mail: hands-mindanao@nifty.com
http://homepage3.nifty.com/hands/
郵便振替口座　00210-5-72693
（加入者名）ビラーンの医療と自立を支える会

－　すべての子どもが学べるように　－

－　平和であることが一番　－

4 月 12 日のテレビで、「ミンダナオ子ども図書館/MCL」館長・松居友氏のことが紹介されていました。「～命の現場と向き合う日本人～」というタイトルの番組で、ご覧になった方も多いと思います。

松居氏については、10 年程前、同じミンダナオで活動されていることを知り、講演をお願いしたり、当団体の事業モニターの折、キダパワン町の MCL を訪ねて一泊させていただいたりしました。今回、テレビで紹介されていたように、その時も、諸事情で学校に行けなかった子どもたち数十人が、民族や宗教の違いを超えて、一つの家族のように暮らしていました。MCL 奨学生は、支援を受けるだけでなく、支援する立場にもなっています。イスラム分離独立派と政府軍との武力衝突で学校に行けない子どもたちの居る場所に行き、本の世界の楽しさを分かちあっています。

MCL の活動に見るように、ミンダナオ西部地域には、紛争により学ぶ機会を奪われた子どもたちがいます。シリア等の中東諸国ほど長期の難民生活は少ないですが、子どもたちは、「平和」でないと学校に行かれないことを知っています。

－　辺境の子どもたちにも、学校を　－

幸い私たちが関わる地域では、少なくとも当団体の活動が始まってからは、紛争により教育が中断した事例はありません。3 月の訪問時、タシマン村の森林事業モニターを取りやめましたが、これは隣村の炭鉱関係の武装グループとの遭遇等、万一のケースを考えた PFP の助言に従ったもので、イスラム過激派に関わるものではありません。子どもたちや住民の生活に支障はなく、事業も順調とのことでした。

少なくとも地元住民には「平和」なこのタシマン村シエテ地区ですが、数年前までは小学校に行かれないチボリやウボ民族の子どもたちが 30 名ほどいました。公立校も SCMSI 校も遠すぎて、特に年少児童は通えないという「辺境」の村特有の問題を抱えていました。距離だけではなく、特に雨期の通学は危険を伴います。1 年前、隣のタクネル村ティヌオス訪問時に、樹木の消えた山を流れ下る泥水の勢いに驚きました。通常は幼児でも渡れる小川が、短時間に濁流渦巻く大河に変貌したからです。

元 SCMSI 教師のアニタ先生が、この地域の年少児童のための「先住民族学校/ILS」を創り、ようやく学校に行けるようになりました。（78、80 号参照）

4 年前のビラーンの村ナブルも同じ状況でした。鎌ヶ谷市の市民グループ ICECK の校舎建設支援により開校し、この 3 月、5 年生までの 250 名が修了式を迎えました。CMIP 運営の 5 小学校中、最多の在籍数です。開校時の新入生には、10 歳を超えた子どもも多数いて、学校開設がいかに希求されていたかがわかりました。

このように、山岳部先住民族の場合は、学校までの距離が初等教育普及の障害となっていますが、村（バランガイ）の中心部に、最低一つはある公立小学校に通えるようになる前の、とりわけ年少児童用の教育施設が求められています。また、これまでも繰り返しお伝えしてきたように、一般に貧しく、山道を 1 時間以上かけて歩くなど、通学条件が厳しい辺境の村の子どもたちには、給食の実施が出席率向上,中退防止に役立っていて、学業を続ける力になっています。

学校があり、給食があったとしても、武力衝突が起きれば学業は継続できません。6 月新学期には、すべての子どもが学校に戻ってこられるように、特に西部イスラム地区の平和を願っています。　　（山﨑）